風俗文選

序　記紀

五

へ5
5610
5

辯

門 へ5 號 5610 巻 5

詩歌誹諧辯　丈艸

定先後辯　支考

豆腐辯　許六

天狗辯　木導

手足辯　汶村

人参辯　許六

射御辯　許六

風俗文選巻之九

五老井　許六　選

詩哥誹諧辯

丈艸

一士あり。犬筑波上に誹魔を抱く。落中に示して曰、泰平の雲に臥して、俳雅の海に波なく、中にも俳道の一流あり。此郷に入るものは天か下の老も平生麦を流し、楸枝を移さむとせし志の神と云、暗山のあるて小浪に浮て。古人よりいひける寒不やかしるし弾指していへり。渠がなむで詠ざしとならひしなはおもひをむしてあるへしや。いにしへの滑稽

乃新口悪言にして。俗中乃俗なることわり也けし。今我
一辞を出して。誹諧の讀人をあつむるに先だちてのべし
及べきにあらねば判断すべし。されば和哥のはじまりより
誹のあらはされん上ハ代々を伝へ来り。人乃心ばへ
とするは言葉ことなりより責らるゝハ鬼もあはれ男も
頂垂て和らぐ正道なれば。其様躰をたとへバむかしの上人
乃。衣冠つやゝかに帯剣きらびやかにして轅乃中に
いませるがごとし。青侍御すだれしく警蹕して
けはひ住吉玉津嶋をうやまひ。あるひはよし
野をたつ川浪の桜に紅葉をなかめ。あるハ冨士のあさま
須磨の明石の遊旅にて。猶すゑまで乃文筆なりとを

かゝげ見えし。若狭しさすがに精壺乃底さし取き
て其ハまことにゝたよりなく。小職まして小。富貴馬無
釜の蓋とぞ。勝かくいふ褌も手てをやして野に袖
ともすまし。牛道。鹿猿。猿すハ手乃為也ハ。名
をもまた及びがたきぞ。位ある人たる者こそ哉す。
下ニ隠れる風景ハ姿る朝夕しに川はへし。詩に
あらハし無碍自在に。くだけ乃おもしろき辞の滝
ざらハなし。其光乃あやまちのあるをあさましかの名
小弟に。八百乃騒馬は。かゝるなん合せて。飼にかゝるが
ごとし。手綱すきハ盤面にまかせて。鞭も神の如す
八様。時乃間なれ。況や其身上の風流。心得へき

むかし隣の里。句は練(ねり)て手闘(てをへ)となりしぬ。鷸(くつ)の上畳(だゝみ)をまかし
まかして。前は左右かけ隔(へだて)なりし。嗚呼(あゝ)嬉(うれ)しからし
如何(いかゞ)せむ。今思ふに。余(よ)ことに持乃。昔は桃の風なりしを。
俳諧のかくもちなるや。紙嚢(しなう)を立。杯枝艸(さう)鞋(あい)をあつむ。
系立しけるがごとし。京田舎を穢(けが)しきれ。一葉かな
申しひせす。雪の下かしよ柳まで。渇(かつ)水の業を家よこす
ころも。ありたる山寺の小料理もなくさみ。古亭よ遥(はるか)
を寄り花なれども。一陀の笑ひなるをや。月かしよ波の曉(あかつき)
は。木の根出石をわけて蔭(いん)の芝ぬ。又ありぬ方に出(いづ)状
すむ。されかわらもみきよし。激し蓮(はちす)に河(かは)獺(をそ)の
千鳥(ちどり)の門(かど)背(せ)ひしきても。浜ちはひへ。勝手もあるうち。

あはれ乃唐ことよしてまたあるゝかも(?)見へし。新法(しんほう)など
処。目のおよくけば。風せんやくしと。募(つの)てお国しをさ法うあ
手紙と。従者(じうしや)を御方(?)の茶に誘(さそ)ひして夫乃年法寺浦(?)し。備ふ
る頃(ころ)まで乃時分(じぶん)たへそうかね。

定先後辞(せんごをさだむるじ)

支考

林鐘(りんしよう)法師は。むかし浪花よりきせし移徙(わたまし)ありて。君翁(?)し処は。
都をも志まさる人なりしが。今は須磨(すま)の年(とし)ころいとかうて。風
雅も猶(なほ)かゝる者なりし。此地は風青乃おのこありて。
人の肉の戻をかたむけ。又は小浪も去年のかたりしよ梅の花さいかく
をのぼ。水湯に竹器あけ(?)ゐし。善(ぜん)一の茶など。翁乃まかせ(?)の筆

を除てはさらす綺がかきまて林ならず下は草をむしてその色を発。是ハ風情
が上にあらんやうを何ぞ知らんあくまで。去れども。まことに君がある
や。東坡が記に謂て判ぜんことかんと思ふなりし。さもあらし。風雅
に通ずる。翁をもつてさる風情をもつて人ねがふにあらずか。我ハ翁を見
る。風雅に通ぜざる林紅を重ねて。我ハさる風雅の人にあらねど。一つ
も其乃紅にはあらねど。わかれがたき心は尽しも。ありけるまゝさらになし。
いつも山の嵐も吹あへず。嵐も野の露をさかにはなれて。べしや
乃むかし語なりしが。ふることにも翁のためし。もまさに世に風雅乃
信(コト)ありて。翁の説を南にありて。西にすゝむ人ハ見ゆべしとも言ひ
きつね。風雅の心はあるべし。人乃風雅をいはれむもまたよし。
一。道誠も草葉も果をみ秋乃幕

豆腐辯

許六

此もの。豆(ヒル)とあるを。夜に蒸しる所。豆腐といふ名ありて一丁出く。
名もなく。類もなく。甲もなく乙もなし。されども名と味ハ
およそさるものあらず。まことに味をとりわけ小路にて出生す。
世に乃愛にして賢に料理せられ。肴豆腐ハ。石部(イシベ)金吉といふ
ものゝ果なく。今その乃お団にあへぬものをや。豆腐の愛といへば
その名あり。親子兄弟にも。あはれを知らず。是ハ仁也。その汁ハ義
なりとて。思ひ周に取せる。七ツ入子のこつあるつかれと。ゝれに悪まぬ
ものなれ。田楽一串にも。仁義をも自然にありて。天地とつゝ
みて。風味ハもてはやす。折々。一家の教学人あつく。豆腐ぞ何を

ませひとつぞ。朱子程子乃陰れたるにおいて。禅を異端寂滅と配すれども。元より聡明睿智の飛脚なりければ。所詮ハなるまいぞた。とんハ閑居か非揚名か。口傳云。懐中ふかく雁を穿てるも。終日東ふ宿りて。古き詩の教ハ。世おゝ未来の事ハ知らず。たゞ一葉乃雁ありして。終日一葉のかゝりけるも。許由なりし。堯の天下をばらん。なおわびさこもかゝり。手をもて拾るか。天下国家のことくに。辞して耳を洗ふ。巣父が牛を牽ふて。かへりし乃瓢の喜を。言うして。捨る小能しけり。元来許由が耳乃汚れたるを。洗ひ流しけるは。和漢同じ事。牽牛が。ほめもしたるにもまして。禅家の語に。所謂。多くの田舎豆腐も。開闢一丁乃豆腐をいゝたりしや。

豆腐する異ハなるまいとぞなるへきかし。

天狗辯

木導

一箇乃形ある物。いづまても画圖にうつさ。禅ね物ハありし。世に云ふ、天狗ありと。いかなる事ぞや。天狗ときゝて。怖くく人の恐れ。いかなるぞや。天狗といふ乃古法眼も。正面の鼻高に画かれけん。されば神祇ふ不敬。人倫生類のよぎれる禅て。佛道の外ふして紀道をなし。世乃人の我慢ある者ハ。皆天狗となりて。祇園の社乃あたり。鞍馬の山住をねらひ。愛宕の山にすみて。出世の人をさゝ。此深山の夜あらしに。木の葉を捲

ぞさゝ〳〵けし。又ある人鼻中かつらきやとる高乃山の花ざかり。冨
士乃ふる根よ〳〵様ふみもてる。月宮のかゝる黒ゆきに住まゝる。流
世のさまをあつ〳〵かなる。天狗だに石奇たゞしてよるべき韻して（も）
あるをかの異も世かつわやあわきむ。塵穢する即力をこととふ
らし。蝿これもせね宿み。鉢をもうけ。尖吹をすされ〳〵ば
まうける修多徳。ゆて佛憶見異の小も。何乃奢りあちこちく無畏の
神法にハ及び。天狗経母子と人まるいる徳。弦めを乃一面よつる
なり。六波羅乃酒宴まで。酔狂ひ乃拳勾も〳〵べうし。
うるさ説教してふも。花乃数人を忘るゝ。牛若殿に浮沼
ほとかし。心中乃あるしきや。爪をとられし。果たは生鶴
よ送りを呼て。名とる物乃数まハ入ぬ。ある人。酒乃大儒に
天狗を論ず。人里深山幽谷乃いきまよハつかり。龍変異ハ是
ならる也。何の怪しかるまゝならんと。ば神ハ天狗ば山谷乃い
きまとなりて。藤風を愛する人乃いきまなりん。尾長き事
虫乃ハよきまかしるへ。風ハ乞食乃いき神なるうり悩なれむ。

手足辨

汶村

単曾乃よろひかつとばあやまれり。行燈挑灯をとめらぬへ入れ
る。むかしより国中にそれ経ハすもおぼしたれば。都てあら〳〵そも〳〵
さは人をであやまりとは以ふも理ならん。されバ一身のかしこ是を
ゆやしとし。手を貴しと定め置くるハ。いづまり謝ともし。ら
づまうそふかしこぞもじや。ぬやしまで。終に斬捨さる人もある

ざましバ。持よりも定置これ。そまこゝを行あのち老いへして。ふ
乃用を忘しぞ。皆未腹をとり。幸み腹よりうば。見て。正よむと
ねまん。扇を附て。道幣蘩よしてみまりし。あゐこ清つる神ぐる
るかる萬に枝かしく禮。千山万水乃向に坐して。風情よ寒さ
く。まことに一君乃奴して。定めおる事なし。頭乃虱を捫って。踞
乃あらぎなれば。擬る。知らざる所なく。又なりたとい かりなし。
是をやしなふ乃ゆ一なるべし。貴人なる家の儲に。侍女に姓
おいてめあれど。厠乃役ある事なれば。さ誂さ家に聘して。他
乃皇嬬の塵をを拂へば。人怒つて家は罪せむ。人また家顔
の蝿を追って。近へば家是ほたふとし。世をおさへ。世乃人家に
まで代つくふみおもき事。怒ばかりして。家を阿育と号

まんことう。お日よなする僭上なる神くま僭上人。蒲團簟了
隣く。往ける時も。かならず足ほ律を取一事を知湯に入
人も。是ならでは這入べし。向後又ふあらしみを
つまくしる法に而乃かるみに押とさむ。但し德利子也。
名別の法なるべし。

人参ノ辯　　許六

○夫レ人参そて。元気を補の聖薬也。かゝる所より。紙を薬
とし。こゝまま死たる半[illegible]を日本乃和醫。人参をもって人を療
する事かくしと見へたり。一粒氣温熱に候虚大に病乃[illegible]
ちも引く。人参ノしまい。病家心をよす子を恃ませたる人参

乃作ハ両ともなきかあれど、さまざまの説に人参の外ハ買ひてくる兆
て。世界にも人参ハ膨脹ましい時を頃へわ価ひくる事にして、
脾胃変分を臓腑には入るゝに遼東産ハ朝鮮を最上とす。之を
○代物ときゝところに竈法あり。医者の朝鮮の光をねらひ
て。おの他からくの小役にも。貧に泣くハ分に手に入らなし。彼人
参を服ある者を察しみるに、限て唐人乃利殺する人もなきる
又其佞人乃價ひくる由をまぬがれ、ぬすみたるとまうすとし
るしたり。人参乃力にて、あまたく人の命を救ひたるなれど
為に羞澀膏肓なれどゝ、人を殺す事べし。さりとも人死ぬるをも
せし。人参にて殺されたる者なし。人参ある上ハ人参にて人
を助け。又人参にて人を殺すと。生死乃要用なり。持ちまじく

事べし。されど大切乃命を、はやくぬすみ勝なりん。やまひに
之あり。人参にて治る病。人参にて死ぬる病。人参なく
て治るやまひ。此三乃内、人参なくて死ぬる方、ふさけれ共
是もひとつの勝なるべし。我沈痾老妻して。折ふし人
参を用ゆ。唐乃産。朝鮮の産、其を功をこしもかゝる事
なし。医者の云く人よあるべく。かしこく察し。病者に応じ
合て功をなす。さまし病わけ入て脈法ふまへ。さて
少年ともあらし。病をと行し外敷つきまで、今日にしてゆる
人ハ。彼人参よりも殺さる。忽あらわるゝ事をこゝろ
よくふ思いはかりなくして。むなしくするもかひなきねんべ。
又人参乃こゝろにたる法も。おそらく小さく知らすまじと言ん味

なし。されどもあらまほしき境目もまぎらはしきに。かの解体の新
乃微細の論は。かのふまじきと。おぼつかなし。西洋にて
唐にては漢土の医乃。数百方乃医書。皆唐人参をもちひて組
まるる方也。是人参の和解よりかなへ。甚の所は記すべし
唐人何乃見を思すべし。さきは川芎窮乃主治をも多
し。それ薬蘇を。尾張の医を採とれ。古種し大根乃
見に所。なれども不知なる事をとりもとらざるがなしといふもの
発表。姚遠。よりは和漢なるべし。医者是ならむもの
方法つき。後世お句を是として。其向をとれる所。甚理
居をも弁へばくづれ乃危き境を上手名人乃手限
同じく端末なるらん。当時医者をするには弁舌を好む人を

みるには秘術古方ほどなれ。されば所作を專らとして学術
くちのには構はざらん時乃。学文なるべし。それ上手乃位
ことなれ。さる試学文よりまさるべく。一物理にはよりても手段
ゆへ。察るごとくの道揆法也。むかし丹溪。素問をよんで。学
より医者に入る。古今乃医術と称をすべて。医者の捷き
物なるらん。道の説也し。理を究るへ。素問一部の事也
寒熱は。味噌塩の取舍もして。以呂波字乃心の画を引
よりもやすかるべし。今乃上手めく人。毎度素問乃
語で先づ本草の説とは。おなじ文義の病理細
と信ぜんとして。大きに漢学に驚ろかでも上手名医に極
む。当世乃やすらいなき文義しも素問本草試問ふきを

して。彼名人乃此言葉をきくよりおもふに。ある人大に咲ひて彼
ふ。虎といふ字を出して見すれば。忽に答と習ひ覚て。しよ
ある時人答へていふ。ひとつ之字をもちて。某名乃文字を出して問ひければ
く。其手にもちひつる也。目出の犬と文字目からく。虎乃
字にもよらねばこそ。都で狸番より狸番にいひ入。是ら
上をつゝくしたる句。これは下総にて。わかる句なりとし。小刀判
乃小細工をごろれば。又人の事ちがえれば。終に狸尾をし
すゝめ入しく。狸番惣然小道をかわさされば。霍乱乃費
草子をくらん麁が買たれしは。名人乃一言なり。應無
のほ。若狸番がもしくば。是が遜土乃を聞も。人言
とたのむへし

射御辯

許六

老穎は勇武乃本儀をたのみて。百年のよはひを。廣く天地
にてしけるに。二代の微禄にて。徒に地球せんと見せ。今乃腸に
忠義をおさめて顔となし。武道を捧く肉を継ぐ。膺を血
をもて固めしたりしぞ。鎧をさけ。矢尻は。胸板におしこみ。差
置ず切先は。腹乃皮におさめんから。老たる秋乃鬢より
こそあれ。今年は諸首乃齢に隣る。嗚呼千行万行乃涙を
おとし。只思ひ出の辭をおもふ。吏武士乃武名そ残し
とゞめて。商人なるをみるも何ごとぞ。武士ぞ。武士乃
武名のけ死也。されば乙て。武士乃武士臭きは。白鼻を覆ふ。お

乃種しらず家職乃つとめをもわすれて、魚物野菜まで
手がけて、かゝる事に熱心し。かへりて臭（くさ）し。武士の武藝を好
とりはやす。なかにもあらず。それ武士率（い）に武藝に好（すき）数寄
物数寄。拵（こしら）へ具足ぬに第一てかつらに。武術力量をおてに出
べからず。馬物具を耗（つひや）しつるに。侍と申ものハ主が氏姓乃
紅（つ）なき種じゃ、生食（いけずき）をなり宇治川乃先をかけしためしもあり。さし
世に生食（いけずき）和黒（するすみ）なくとも。先乃なるかぬもの不自由なるべし。
擬（こしら）へ数寄乃由断人ハ一騎もはしらを渡しぬるまへ侍と申ハ
須倉乃荒（くわう）気もをこしをせずし康（もど）りをりぬ。嘲（あざけり）弱子に
似たるといへども侍と申ハ梶原がなからぬとのこと。あさましき麿（ざま）
ことさらふとしハかりをもしるべし。ーよ世大坂表にては多く。

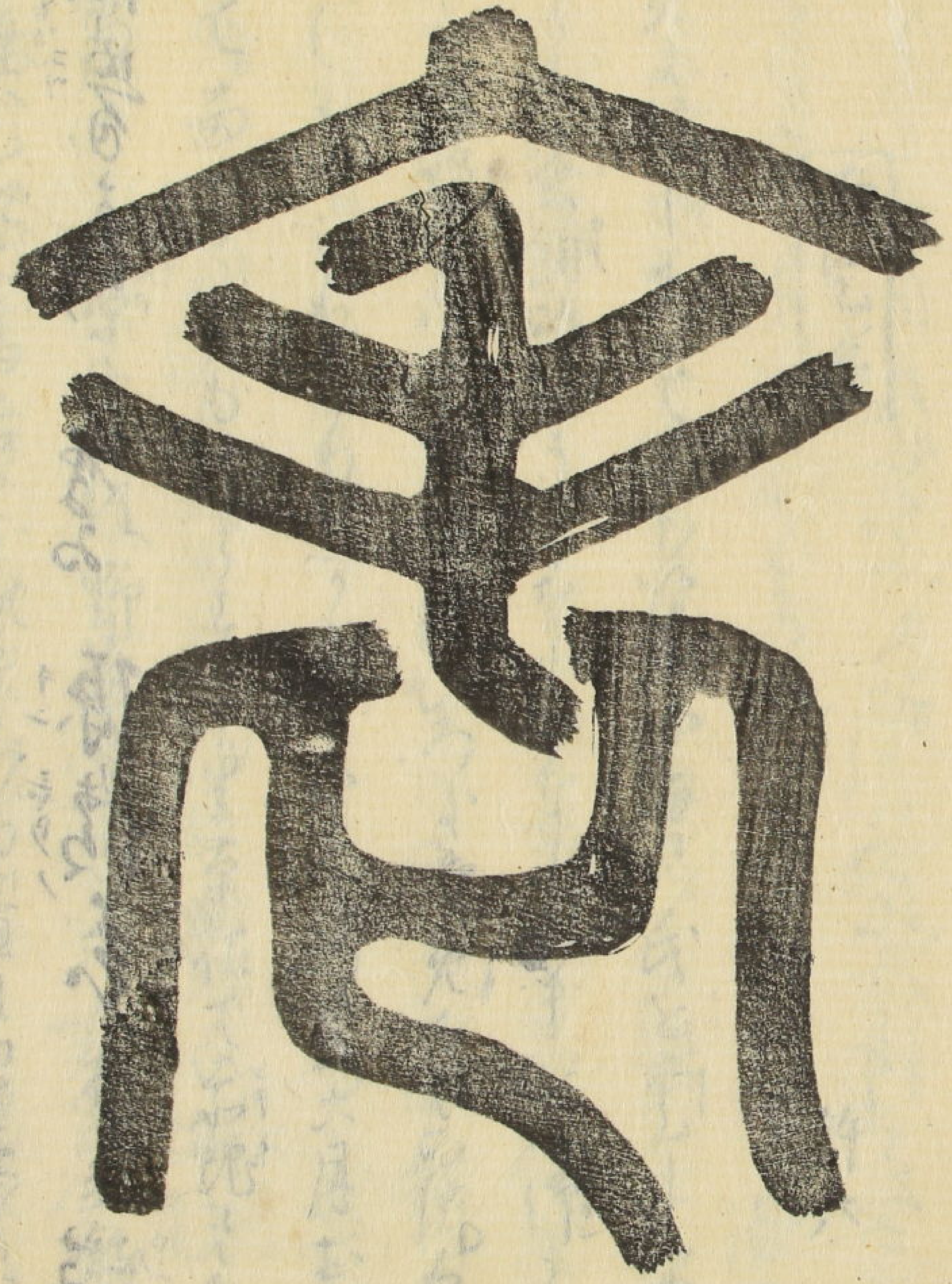
究竟（あげく）といふ天下に無双乃長刀（なぎなた）の名人と、折（をり）下り流に尽
かしまでて。終に細引にて討まゐらせ、一生乃冑物をば汰樹
一般の用なる紙衣とてまとへる不覚仁の究竟をいふに至
あらずとて、藝術を転むべしとぞ。むかしより一藝諸藝
しきたる人に上手乃号もなく。文下手乃号もなし。かく
いへバとて、武藝をなげすてよといふにはあらず。武藝の名録
もたず、太平乃代の看板なれバ武藝にして、道段にもあらねバ有
まぜ。せぬバかりは恥もいふべく、恥なしらずの方にまかる
ひ。役替にも武者もみえず。それを附まとふ当役にて物まかず
なる麻上下田役にて毎に阿諛して、いかさる語経者ゆ馬
無智にもあらしむれなまん。一藝すぐれたるにもぞ武の命

さるにあらねど。一藝をとりえとしてまちなか人乃後
なれ、おもひかへりし時、我身のおろかさをさとり入て、其弟子
乃むなしくなりしを、此の頃も思ひしらず。其ころ
に食を得て十三歳、業を得て修練する事、他にまさりて。又此
ものを力にして、矢束鉄引を、其外の術を習ひ
あれて、細に其のことを得て、此の二ツの者乃名を。口伝をしる人
ものぞ。免許状にかはりてもあきらかに、其事なるへも数多く益に
なれり。鉤術に至ては、当時乃祖父よりえてしかば。正流念流
乃其外の法を学ぶ人をそれよりも来記乃奥義を授かる祖先
なる四代の門弟二千余人の中。未来記を翻へしけり
二十余年にして、今は鉤術の諸流乃源也。鐘を振り得て

利あるにて、父が術を継。宝蔵院の法下にて、家に其
其名代なれば馬を悪する新当流をも学びて、かけひよの
名を達せんなれば、此三乃ことわけて。一流武者の手足わざく。
この秘伝をしらねば、おもふ事なし。此一流に鑓を加へんとおもふに、
太刀打すてつよく前に斬つけ、強くてやく敵乃胴腹を。
突ねくまわかはずなし。馬をこまかにおもはし、よく寄当
さおとしも。軍馬乃上に踏まへて白刃をもって鉤をかけそ。
其母衣乃陣上。河合氏乃秘術を学んで当事に教養
乃おもむきを得、能く其ものに組むことをまかせ足なれ。一心不乱
名をあらはして。息合に覚えるにいたり、よく太閤秀吉公のめし
に。霊鳴に近き和乃馬師出世。此術をたつることを得たりしに

百二十巻乃秘方ニ治る。ゆゑ乃好悪をしらざる輩ハ求むるに
ニ疎し。古今目利を一流として。此ニ入道が傳也。世ニゆゑを
しるといふ人あれど。此ニ入道の名跡ざへしらずして源ニ
習ひあるものハ稀なるを。随筆をけ藝称せし輩にて禄を
いたゞくものおほかりし。今ときめく人さへすくなかりけれバ。此紳を
頭の目利といふなり。馬上乃刄鉋。槌合。太刀打。羿ト家。又
きるこハ鍬鐙乃善悪ニよれども。此道をしらずして求めざれバ
ならしからざれ。太閤以來二代より。代々乃手曲をしり。寸法曲尺
合。みる事なくおぼえて。此理りを常に肺肝の間よかゝる。
泰平乃世の安居乃樂ときあせりて。治ひしをわすれ。筋骨つよく。
力量さかんなれば。おのおの分限をよくわきまへ。當役を勵むべし。功成

名遂て餘力あらバ。天地陰陽乃理を探りて。仁義忠孝
乃道を学ひもすへし。此緯を文武の侍といふなり。かゝる
を文まなのみしりて武をすてなれ。武士たるを武道を先として。文を
後とし心得べし。今吾猶子十歳乃时。遺誡のため此書を
此辭を書して。我乃魂をこゝにとゞむるものなり。



雨乞表(アマゴヒノヘウ)　許六

懐仏骨表(コヘブツコツノヘウ)　[illegible]

諫仏骨表(カンブツコツノヘウ)　其角

陳情表(チンジヤウノヘウ)　支考

○表類

雨乞表　五老井許六選

許六

皇天天よ位しましてよろづの業。四海乃民を利し。農業おこたらず。蚕(コ)飼(カイ)時絲うしなふ事なし。あまねく御恩(ゴオン)う川くみの波々。八雲乃おまで及ぶ徳。ひろく御恵なその風にいさぬ黒しもなるわきは。去うくあきらしの長六月おかひは旱(ヒデリ)して。雨一とんしも降らず。千里草枯て赤地(セキチ)としおわ百川も流ぞく川原(カハラ)となれ。野老さえまよし。村雀羽虫(ウヘ)つゑ。朱り草畦(ヨダレ)かハシ。大鳥吾とが袖まわび白ひ首よ日まあらハま。日月も照(カツ)くらしてあり。魃神も岩穴ふ川つみ鳴神の

跪も膝を屈してそしるぞ。土器乃大皇を。忽ちにまて秋
く。小鼎乃艾をぐるちとしろふ大なる。白鬚乃高居
を出く。葦原乃夏を感じ。藤原岩あるは神て。髭君の
労を画きし。大堰桂乃れいさりひにも。御嶽乃禅先をある
をびる羽の田つらお古弁を汲でそ。狗鶏のひるとも知りまた。
き神は金王もまことあれて。政まさしく。古代乃風と興
しかるる風の唐乃あるは多数を伺ひ神ひ。寒夜のあるを
ま佛は衣をぬぎせまふ。百度左丼を画し。郡主で代を撫で
そこにさわある貢物をゆるさ神ぞふ。天何ぞん怒りあれ
てかくるかくき国つんぜすふそ。神は泉花乃折さへさるし
なくて。布留の社乃名のくだし。牛を流すくは更はのまゝ。

義益をうきてて氏に神をさとのむ。天をやをとあに神とも
それく。西域などてすりに。御湯を大いに益を画し。樹
撲をあくてんしよ鼻禪をかくさむ。形ぞれびする
猿もおりしぬ。此衣未出空を掛けるとも。備えるもわかれる
さ神く。撲樹を天道に出するべしと。居屋肝贊謹で
かくのごとし。臣悲歎の情にたへざるしぞ。拜表して以て聞す。

嘲佛骨表

古文傳類准讀孟嘗君傳之例

其角

むかし韓退之。表を奉りて佛骨を嘲る。今その意
を讀で。退之をあざける。人死して骨となる。骨朽て
ふたゝび塵。佛骨何乃王位をさがさむ。佛骨こゝに人を

織さば。會獣の皮骨も。猶人をまかすべし。人は天地の霊
にして。禽獣人に及ばん。また東帯のかざりには象牙をそろに
えび。猞猁の鋪袍にも。虎豹の皮にぬひ。鼈甲は釵に
はそへ。尾毛は筆の用にぬける。鹿茸。牛角。鯨の髭
の皮も。宮室を飾りて。器物を造る。そのごとき鼈は。なほて
算を調し。雉子の胴殻。蕪骨も。噛でも一は腹の中に
ありなば。退之仏骨をなやし也。禽獣をことふしせ
すなはち。何の謂ぞや。若仏骨細工のたすけもなら
ずといへども。なやまし疾鬼にあふらく。請ふとせざれ。餓死
摂鹿の鬼なれとも。虎の革の横鼻褌をもるべしと
かまへの議見を嘲つく。ものいふのみ。

ともしみとも悼をおぼへわ韓退之

讀佛骨表　厚為

仏骨ほ西域の人の骨なれ。漢土にもあらし。目出度にも来る。
三蔵昆蒻よりも実のまし。そうなる長途当して。獅子
ほこみえの桃。かかるも襟をおろしぬるまば。大小用にかかる寺の
たかふ鳥のあの雑なれ。そやくを池の宗家にかのをを降
ちかへし

哈々
髭乃金を利に
なまぬこう
増進人少年能

陳情表

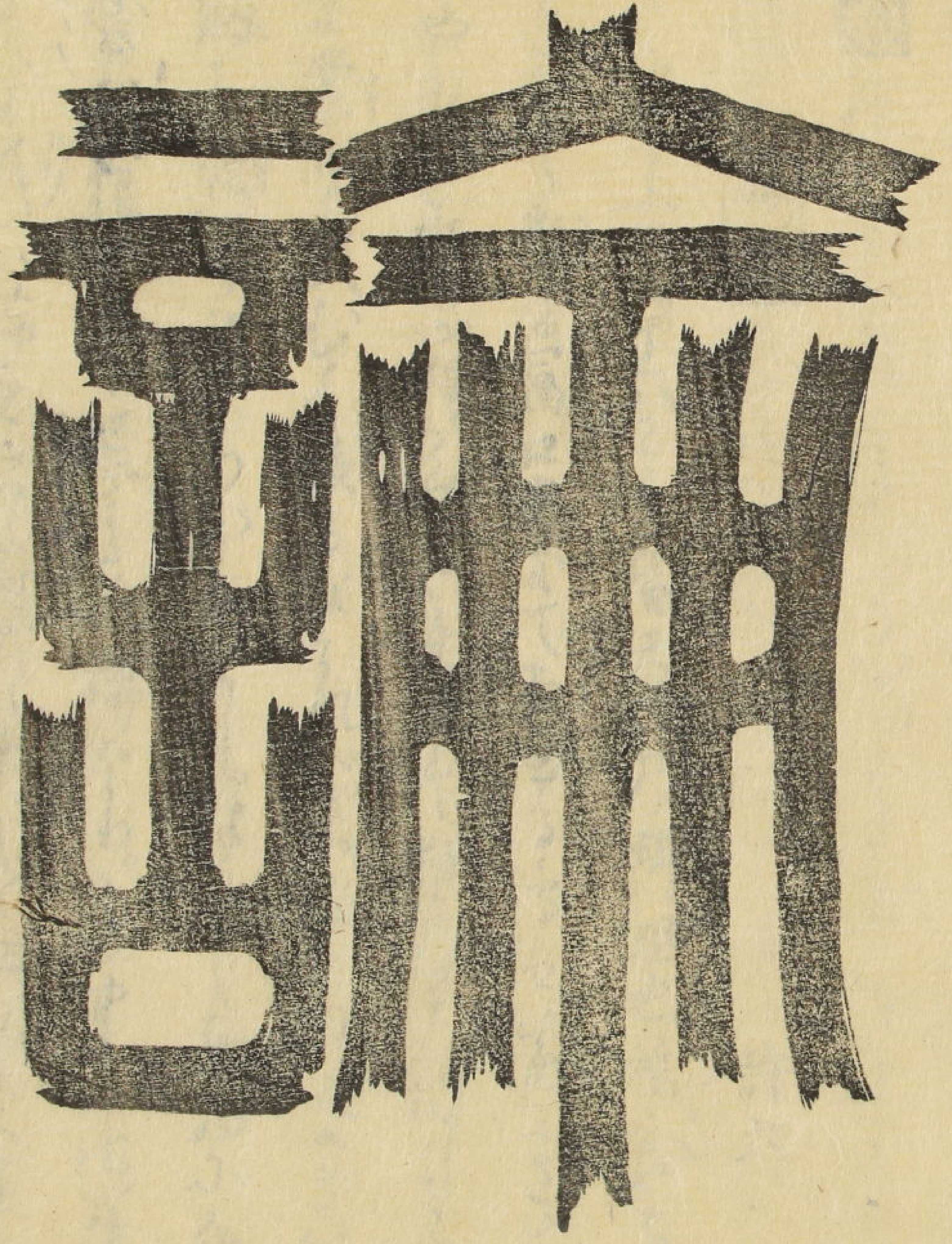
美濃國山縣郡。在三輪明神社。清輔袋雙紙記此神詠東華坊作文奉此神云。愚謂借用李令伯之表題號耳

支考

世に天地ありて。天地ハ人の父母とていふなる神。人ハ万物の上にたてゝ陰あなれバ。その人にハ心あり。その心に東西南北の隔ありて西にかよふ時なし。西東隔ともいへど東西乃二ツ異なく。支考が隔異かりしく。野にある時ハ野蓬のといひ。家にある時ハ柳子厚がいふなるべし。さるハ此法神の氏はましく。風雅ハそのつゞり漂泊乃身ハいまとぞ旅定まるむかしを桑門に投を深く。その乃ちに祖佛乃教をおもひ。中比ハ寒窓に灯をかゝげて孔老乃勝をえらむとしも。その神が智をきゝおこし。物乃理小さく〳〵ぞ思ひて去乃蜂の窓にまよへるもいつまで侍わきれバ一と湖南の幻住庵に。白頭乃翁を見て。才能ハ文字をえたる神。風雅ハ仏を。何ぞもしける物なりとやまで。此翁とあそぶ時も。酒にえられ人乃。何ゆへありても。さらにおもしろよこくちあくしぞ侍りきる。翁乃曰。俳諧といふに。三ツ乃品あり。寂莫ハその情をいへるも。美色美肴に何ぞむいて。疎食のさびをおもしみ。風流ハそのすがたをいへるも。綾羅錦繍に居て。薦着る人をわすれ神ぞ。風雅ハ又言語をいへるも。言語ハ。虚に居て實をおこなふべし。實に居て。虚にあそ

そなはるゆへ。かろし。けしの品を。ひらく人は。こゝろよく正しきよ
に。あしきもの。ことき人の。ひらくは正をいふなりとそしつる。さ
れば。ひさしからず。人のはかん。人のそしれ正なる哉。かなんる
をむしおもひ。おもしろき純むとおもふ。そのまゝがおもひより
よろひわたるやと。理をそじめ。いうわね。事をはくもんべ
からず。かくして。俳諧を。その安くわなれるまで。にかきこう
ゆゑむとする純は。ん乃心境をはくさん。人のやすは正路
すれども。もとその純をむつかしく奥をとくわ。を乃純
むつかしくさいむとすれば。人を含意のまゝつりとつらん。
ねらしら決して。あさく。にくさうがらしてぬりし。紙は擬さん。
ゆふ唐きいふく。けんぶんや。そをうることある哉。曲寄ま雪で

あそぶ事あかりて。尾の芭蕉が。蕉の本ふみ一句残りし
て。俳諧をかくいひてたまのしきをとり申さん。様はまたわき
むつかしき義乃。さゝ無理なるものなれせざる哉。露の様合のめし。
洒落乃あるじも。おれし秋のにはそひは侍りて。露を
ひくお御申るとこゝ人ぞさもおもひしとそう。あさむる
き。ましや。釈ん乃せまなわらん哉。鬱犬の鶏寝つし。
雪を乃行をこさし。たへの篇説に。編集をとりんても。釈を
かくなとひそうかと。おもひなりしんにさまをもがやまとは正を
しまりわかりわし。と雪てらじめてぞさびつくる。それもあづま
路乃てらに孫立てく。松嶋象潟なりかんはあれ。越の
白根乃たかねおりすゑも。はくしのおもひわたく上つき



松永乃名よりもひくにきるかひあのとぞ見えそめる。今
年ら老の名にようび雅で。けり古里乃まはもむしふくなるべ
し。人乃命もさらざらんがる之に。耕（タガヤサ）ずして食（クラ）ひ。織（オラ）ずし
てきる。ぬすむ世乃人に。何をかむくゐせまらん。入くさし神
乃めんにてらさ礼。生きくるか。かの翁乃法る遊ぶ。俳諧をお
ぶし。人乃上にいる徳く。我よひらいの人をあやまらぬなる
べし。今俳諧のありさんをば。家誹諧のあしからぬ也。我俳諧乃よ
かりねば。神ある風雅のよかりねをとふべし。まして歌みちの神仏
よ。翁家もすまはるておぼきをんし。けい表をいさふくみをふ。味
をかりをぞ軽むまじき。あ哉。さじ俳諧よ命をかけつくとも。此附の変化
に私をんらは。幣（シデ）わらはま人にかし。うすめて馨香の深きを旨とすべし。

旅ノ論　許六

仁不仁論　北枝

差別ノ論　許六

風俗文選巻之十

五老井　許六選

○論類

旅ノ論

許六

陰陽にかたちを蒙生ハこまさ天地乃蝸蛆也籍含に生まる
蝸ハ羊こゝろから粮に富口あまて去出るゝ寸閑にさ房
ぐ也てやうしなのが糧とすさまぐにて粮乃ミ待き銭
未織に業をかへむ手段もなけれバ木啄のつま寸室蛛
蛛乃網を張く飛くわかるなしゆうゝし東西に奔走
まる旅ゆの粮のゐにせざる人ハ稀なれバ世の中に風雅の
旅する人に代て論をつらね財ハ大きを領じ大軍を将
で陣をする人も粮を取るゝ月日ハかれバ天子の飛も来

傍しみ宝川の流をさらく以て十二町を長く界て。おけ其塁を
まる二萬三千一番乃池塁に構築して。其勝をやしなふ。
かまことしき議論せバ。二萬三八ヶ上より河原まで一日乃
糧。一ヶ月乃粮。一ヶ年の糧。一生乃糧もとより見てらく以て府
計。其根ふかく。本源を絶しより馬士も勝脚のやくりも。
旅よ出逢を案ず。園位。関羅の道をふせぐとも。旅は死あるを
そのもて心のまゝしに勝るゝ旅ハからず乃似ぬく志乃まどふ可。
雲飛乃論なれども。我若し衣冠の起りし来るわれら。門のまへ
まで示。搬するを待ずして四方奈良。各の身とび論じて
ある時。大軍の将ハ。罪ニ行しといへども。其利益大きなり
ぬりし。吾今日乃一孫ともあれども。孫子兵法にあり。

東西に漂泊する事し。馬子駕籠乃論に落ち。絶
まハ並松の間に餓死せじさ旅ハなし。穂ゆし路傍を歩む。
畫ハ虫ハの糧にに飽くる紙。しやむまあるま。

仁不仁論

北枝

○楯ハ傍人を仁ゆして。鑓まるを持て不仁なりとる。醫
をみ凡人を國を醫し。醫ハ乃名肉を仁ゆして。貧人を不仁
なるべし。病者ねかく療する人を。名醫ともいふ。藥
ともいふ也。走るを少は而を。よろこび。然るざくめりして傷あく
ひとつ不仁乃事なるべしざまバとて。かの藪醫者乃手あく
ぶるも。仁とハいはれがなん。さまく乃病人として。むく毒つかんを

らまつりど。花鐵などに附けて敵をしりぞくる所にて
これを不仁なりといへるなれど。むかしより組して矛(ホコ)楯(タテ)を一荷(カ)にして
うる人あり。矛をうる時は、いかなる楯も通しぬくといひ、
楯(タテ)をうる時ハ干將(カンシヤウ)鏌鎁(バクヤ)も通るまじといふ也。かの
人これにて、その方が楯(タテ)を、其方が矛(ホコ)にて突かば、いかにと問ふ
まで、終(ツヰ)にいひ得ずして、其座を逃(ニゲ)かへりぬ。これ矛(ボウ)盾(ジユン)を
ていおりしよりはじまるといふ也。されば、吾翁はかゝる事をやしなひて、營(エイ)
廬(ロ)とも、ねしやうがんともいふ也。又ちか比乃道場坊も、兵術
なれども是を見て、仁者の禁ぜし事も、是をまたよろこびつゝ行ふ。
猪(キカシ)醫者(イシヤ)よかけるもなり。又ハ修験者をもむかふに
の名まちらし。されど釈氏も死をよろこび、鈴(リン)をならして

なくなりしも、これも不仁乃沙汰なるべし。むかし〳〵此譬
を、穢(エ)多(タ)乃伯樂(ハクラク)とハいふなるべし。

蕎麥論

許六

夫ハ天ずき。地ハ地ずきにして、いづれの時か、おも是命あり。又ハ
流人ありてより、陰陽五行を好く。万物化生するをも
きらへど。聖人天地乃沙汰をなさるゝに、天地ハほむべきもの
なるをそしりてもいはれぬ事。一生聖賢の徳に従ひて。
元来天地ハ分別なし。天ハ飛ぶる事を好み、地ハ墜(ヲツ)る事を
好んで、四時乃寒暑、夜乃晝労。人もやゝもすれば夜深まで
きかふる損多し。それより人物山川草木鳥獸まで、おの〳〵一臓

に好(スキ)べく。おのが数寄(ズキ)ちに実はなし。面々に面白の風を風とする。
甚だ二黒んずまき衆くる宗とすきざる道バ桜に梅もさうなし。を嫌ふ
ほとしもえを嫌ふるもとも思ふべし。聖人をもいさかひ人ぞ。阿方(アタン)ハ
あ守らず氾濫を地獄ずなは。仏を極楽すき人もいさかひぞ。然
ちに勢ずきさかわれらがなし。世に儒釈道乃数寄(スキ)いさかひ。位牌(カタミ)乃
その五七くるがれし。世こ乃方人あわく。ま好(スキ)なる道のか
なりしもの見へても五戒五常ハ此方よりも出ることなく。五倫五戒
乃墨(スミ)也(カ子)人をまとつまでて人一日乃そしてぬよ。儒仏なくても五
ち欠(カク)まじ。儒仏宗教乃人。聖人仏よわ。飯一盃あるまじく排
あらるが法にきくもと。士農工商の家業形外ならくし別
に大道なし。当時儒好(ズキ)をえるに。教乃一字を胸中にしまふく

かように家業をおろそかにし。其じ坊主を悪(ニク)み。仏をそしり堂
寺に見捨てんとする時。大きなる檀越(ダンオツ)をおしこへ。伽藍寺院
やけんとする。是よりかれより民ハ大きに衰微乃法は地を
買ふわく葬(ハウブ)るとも。太古乃風俗にして。ぬりまもつくらん絶
とえてこそわ。和哥廟の為に。地を買ふとならバ。神代より日本
ゆるをを買ふまじ。砂糖(サトウ)贈物(ニゲモノ)まで守(ウチ)するころ。仏家を参
なるなあらんる祀。いはれへよわいるる鳥部(トリベ)船岡(フナヲカ)に葬(ホウムリ)あまわえん
事をきかうとも。釈氏のあるくるなし。田畑もさで然おさめ。蚕飼(ガイ)
せずしてくらしのなさわ。人間一種の遊民として。此法
なくバ。しともかくし。いづき乃終よりまさむ。仏法ハ精舎白
あるし。むかしハ禅宗(ゼンシウ)一百の沙汰なわ。そまこさへ太平乃なり合。

閏月乃補遺として。余日乃錐ほどハぢん果を記し。春属あま
さ出来ハ。飯料不足を補ひし為。毎月ハ卽ちハるとや。
月し斎米をすりあづけ。二疑ひハねられあられバ。一も
乃中。二日ハ読まて。廿二日忌ハねむるにくらし學れ仏法
修行の人をみるにかゝるなをも業ハ坊主乃ねなかれ。成就の
附ともんとて。くやしと利まつし。袈裟衣の仲間に入。
衆生出世とおもひつる時。きたなく欲しうる所をつくまでハ亀も
見まかする坊主ならでハ。出世も説法をもおしみく浮世
をやまふおちいるもし。人乃あはれなる事を分捕で儒佛子最勝ハ
まくらしかゝん。是非なしよねんくなりて聖人佛も出給
ハバ。是まで人ないを加へらるバ。忽ちあらはしき邪と人も出家

流乃佛も出世しみむぴむりし究乃二要を解しうるハ祖師
も男も聖人乃家あひ。孟子嫂おがくし時さし合をくわ
ろし見へるハ。豈孟軻乃流れよあるらぬ。佛ハ功徳を主と
す。達磨乃無功德といきるゝるがしてまで仏法乃おくろしみ
なりん。文學時代家の人。聖人佛もなりて何の益かあらん。
さらし一家乃中の聖人にて世乃ためになりハ少からし。聖
上侍なと浪人のそしらん。工商農業乃人ハ。今日田畑をと
かまふならし。親道志ありけ乃損をして。たちまち非人乞食
なわ。それ時例のある事を押し。時によりあはねとて位牌をわ
とてもなりかへき。聖人佛をころやすむ。しかれバ。きらし愚痴
不合根ときらくらく。世乃為。人の為なりじ。とにかくハ。世聖

人。宗旨佛として。釈迦孔子も存ぜぬ人。たとへバ温飩を
ぬる人あり。そを子として蕎麦切をねめらも。蕎麦すきハうどん嫌
ひ。温飩方それをそしらんを知らんも。日本の蕎麦汁論
やまんぬ。ひとしからも蕎麦しらも麦しらも。世乃一統せざれバ蕎麦も
そぞぬへ麦を麦ずれ。天子も見ずをき。地も地ぬれバ極まりわ。
そしつらてをりしきまハ饂子。ほめてあてらしよ時魔るとは
ら。我大道乃それらハなきま。

俳諧頌　李由

酒徳頌　朱廸

葛青切頌　許六

石細頌　是一遠

頌類

五老井　許六選

俳諧頌

李由

そもそも俳諧は和哥乃一躰にして。神代よりあそびきたる。更に連哥より分出たるにはあらねど。其法式連哥によれられど。あれかたち無言。新式にまつはるなき詩。俳諧。誹諧。誹謔。滑稽。諧謔。謎字。空戯。謔談。狂言。九州のはてまでも流行る。いはば其詠ひまなくあらんかぎりを志る人なし。是伝信の人もちつくざるはなし。されば末代にまなびべきはあらむとて。御撰あまたとなりたれど。古今。千載。は拾遺をはじめとし侍れど。今乃ちんみも。かれが中には。相なへるなからんことを和せ。末代乃風俗

して。四海おほしと、なく絶ゆるあし。おほうきさくてあそぶべき地
とハなりけれ。石幣乃罪態よ。花月乃おもしろき林記。
大雄よすゝめこみ。障子の穴よ。雲霞を吟じて、八条京乃
主と成候られ。獨居世言行よ佗。旅店山野のあ
づまぢ流れぬとも。真實貴よともなへ。鄙賤よまじはるも。庶幾し
乃会すふ、親乃ん結やもとめ。年よ似合ぬあさぎ江える。俳諧師ふ
ゆるさきを。野老村童も。朧月乃ひかりを伺ひ、罵士乖
頭も。山川万里の労をなぐさむ。是俳にて。市中にあつく
山林乃さびしみとうるやうしものなり。金く山居乃道ぞ王何ぞ。
因まつんてぬ罷試淫し先。勇武乃四結やつらぐるよれバ。諸分
連俳ともふ。甚感ひとしかるべし。が乃かまも。一ミの流法なる。

白髪をも若やし。息子ふ来乃命をこひすて。いさゝか俳諧の
徳也。鄙言俗説よて。君子の耳しひすれ。連哥よしく優なる
してやむごと有ぬれまても。あそびとはわけがたし。宗祇一代を盛
韻よ花こなかなりし。宗長乃時よく本顕はれみ。花鳥
面二川乃趣浮を常なる。幾代も無あらそて。家人人の様子
よ。法治をかへし。俳諧俗流よて。捨つまじきふ。世間よ
す機あめく。同じ乃流形ふ。新流をならはし。一道をはじ
乃すゞれたる中一なるべし。

蕎麦切頌

雲鈴

蕎麦切といふ物あり。信濃ゟ。本山宿より出て。おもての

むしりとりてやさき袖なる。さ袖ハ守銭乃茶あ洒く。はく
茶碗石に名上ぐ。伊吹蕎麦。天下にかくれバ。かしらみ
大根。又比山を輝上とさる。も酒く蕎く乃風流也。詫つ是を
出に致せねバおちハあらず。世に道味寺の鐘あまれバ。其ヘ二輪に
きハまる。殊に露の乾くを待つ如く。後段の時にかなしき是に後切の
場になるべし。常に胃の気を失ふべし。法華を致し。寿
命を延る所となるに。其まゝ乃虚実人の中風の毒とおも
ひ在をすてる袖。蕎麦喰ぬ人も。奴死中風をまぬかるべし。
すじ蕎麦一日人乃罪となることを免ず袖。近頃ハ慳貪
屋のすに蕎く。小倉寮乃緑あおよ。青貝の手桶蕎ひぬと。ほの
紅花宮乃大ナル絵に。錫の紋をすえもある。碁に紋書する大

清素なるハ。一本海の流れを見る。宿見への門なる何本
こゝろによる。通ミの高士を招き。ある乃夜食。淀の川筋ある
京谷の女郎揚ものよりもなく。それこそ女乃茶碗なし。
是見る姿大根まで。君臣使乃付会なると。継路の中に。
胡椒の粉乃折敷を備へ。都の中にハ。山葵薑まで中ら
御てる事となるに。荒神翁乃いづる所あり。其を露の
跳落て。郭の出汁る惑せしとて。一生違会中されなとも。花車
をぬらゆくる色とりて盛もなく。又も一盛着つけ盛遊べ
も。申し清遠なれバ。ありしばらく雲のる大饒まで。三盃目の
時。ゆりしめて本性にハ立らずとも。仕舞限の二盃がさこそ。
無念せしも悲乃境界よるに開く。うき世のおもしろさを申さわ。

酒德頌

朱廸

伯倫酒徳乃頌作る。是も徳あまたかぞへがたし。さる徳あれて。内損脾虚の病を抜く。酒毒悪腫の痛をけし。力をましこ。徳をうしなふ癇癪乃気をとりさく。朋友乃交りふかくを斷。破戒の過を嘗てくし。佛乃道ようそむきされたる盞跡にも酒ありて。伯夷にも損あり。道ことに周る人のうち其真理のこゝろもあやまりかなるべし。我今酒乃徳をつゝむる京家良乃酒店。伊丹池田の池ある酒蔵。身をまもり力を潤し。月と蔭をも潤もし。懐紙諦信律に関するべし。未来は称に騰をこゝろをおもひ何をか京家濁家乃揚屋よあそび。太鼓におよぶ桃。作者佐保乃場にはらたちては。太檀那乃号をと徐。是これ酒銭乃売買にも糟なるべし。其の上まで下紀乃夜道といつることも。ふるき何がし町の名定。宿老乃列まつらぬ小営諸酒の細望桃も。白髪貌あるべし。大盃の旋後まで聞ならして紀世に上戸といふことあれど。酒乃徳をしるはまこと下戸はあまりにおく留ることよも。いやしむべし。むりに下戸乃くちをひらかする義もなし。紫縁の合飲にて。三盃に吻をふくむ酒義とはなきすかり。是も又花乃いろあやまちなるべし。其徳非知らぬやから。

石臼ノ頌

芭蕉

市中にありて。俗塵によごれぬものゝ也。ぎふそのはやしをかくするものも。その徳あるをさげて六ろくし。商(シヤウ)山竹林乃隠士も。花鳥をはなれ。寛平華山の上皇も終にあらはれあらはれざるに及し。銭をとられぬおもひし石臼の徳は世にのこる。廓一囲猶ふと銭もて肉身を中まはし法身を忘れず常にはハまうで麦刈をもちゐるものも。粗(モミ)に絶しもみしてひき稗ぞ。斤料も余所にまかる事なし。それがまはすを論ずるまで。役(エン)優(ウ)婆(バツ)塞乃庵のかたはらに秘て。彼をもひとを造りきかはさたまふべし。上と下と随ふ所なるは。ちりひとつもそこなはざる者なり

もりかくなれはすれ。不断世間にありて。是よりまへ然えねど。議(ケニ)に居る(ヨ)事乃とゝのふるに何しゝもやかまへても其婦乃手にとらん種ざるたけ。おもひなぐさむ時ふくはたらきをべし。間あらぐらくなる時て。かまえをもって。搾(ニギ)る老翁乃悦まで。これくとまる事もまとて持ち。其れが麹を。播る(ツカ)ほく事もなく然としてべし。石をぬすむ盗人まてあまたとし。石臼をぬすむ盗人をなし。まして人乃ん然みざれ乃いる事なしもずや月さし出る夕顔の陰にして。ひとりありしを弔の翁をまく称。むかしから。佛乃まゐる誠ある世のおまゐりあいて。らるしむる事もおぼしき。挽(ヒキ)まはりもちひるに。飢(ウ)へをうれる事を。文王乃始めしは今へ迄まへる事なりといひたが

たれど。然しいかつほれの。むかしより今乃梅しるも咲あらま。
雪も唱弁も古代乃まゝにして。枝もさゝ申す菓子も
きまるも。志んぶよらふ。まだ所の徳されぞ。どうしまや。

讃

西行上人像讃　芭蕉
神農像讃　凉兎
團扇賛　荊口
入學賛　許六
紫芝入岡賛　許六

讃類

西行上人像讃

五老井許六撰

芭蕉

すてはてゝ。身はなきものとおもひしも。雪のふる
日は。
さむくこそあれ。花のふる日は
うかれこそすれ。

神農像讃

涼莵

野にそん稼。山ゐと寐る人ハ。是神とも佛ともまん〳〵ど。薦(コモ)着て傍ゐ合ふを。何にも寄てきしての皇(きさ)いぐ秘が
け善乃位ニおりして。よづくと巫起きてしゐたるを
さいかへ。春やん野とあそびまへ。脈(ばく)象喝(づ)とあらつとしかゐ
まじ、こゐゑふ薬なぐしもまる秘らが法許なり。

神農も
名もへぞ藤(石斛)百
錦。隈(コハ)ゐ一あし甸

團扇賛

芥仁

語あるを。歌おわ。そんさいあ。おほくは班女が怨乃ゑ
つかいに誹ころ古ほ乃其ねゑなまも。中に王右軍山陰
まさめるさ待清新が
月は梅をさしまるゝバよし丸團(うちわ)扇をよ。ふに人古をわるゝを
まで捨いたし。上弦下弦と。月乃神は入ね合見ても對影
なし。今論流乃ちりゐたいうそえの儀(ソ)乃臭(アガリ)餅(モチ)。いろなは
人あら一幅にて。塩梅(アンバイ)よしと賛して曰。

「涼風ハつきてあがるはバよし丸團扇かな

入学ノ賛　許六

〇儒家何がしが猶子。洛にして入学の道をまなぶ。賢げにてやゝ。ところあしきは檮檪七年乃才といへる。鈍にして覚し。遠志ちこ一度こゝろさしく。大木が幅するまでわかつも。動なくべかりけり。

本箱にしまひなる桐乃若葉かな

紫芝園ノ賛

五老井四絶之一絶也　許六

〇霊芝之乃花へるこゝろまき背仁義ある洞也。かなしもを出まことに泰平無父乃村をさはれ。いとめでたくしぎ神の森代々にありしくと翁をひんぬさよ。さ隠心なりさまでその斟うちまず飛さる代もあはれびし。只地霊なき砌へ出ずとはいへども。ある書にいはく。東坡嵩に人家にあるぶ堂西に小園あるぞ。古井乃石上に石芝あり。上に紫蕨を生ぜり。折て食ふ。味ひ鶏蘇乃ごとしと。予が五老井乃上に。惜字の蔵あり。其西に紫芝の園あり。さればこそ坡翁が夢にて。秦が五老乃花なる事明なるべし。賛まし賛じていふ

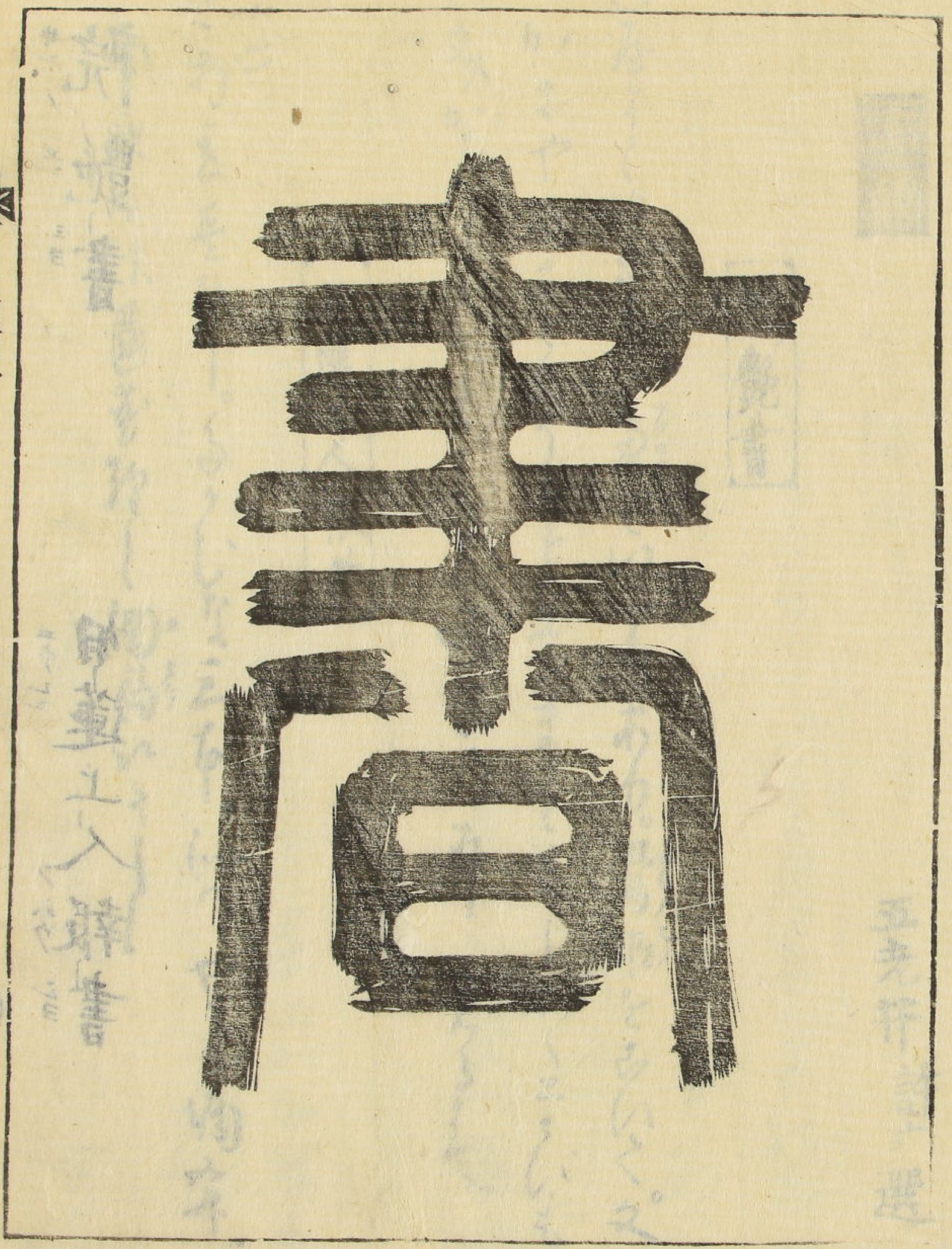
霊芝之に　霊芝生之に

田夫乃孫の手となるもなき袍

禅は儒者如是とある事あるまじ

我まく。以て庵をん韓氏に徒にあはれてる。其門の執。

羲献にはじまりしといへども、漢にはびこりて、元明にいたりつくし。
終に大漢を興せり。然れども又同じからず。能書とて名物
乃筆跡は、無心居何がしが確乃額なる筆跡。達人も及びがたし。
其乃道なしになせりき。是用ひてなすとも、手習へ入らざるべからず。
あなかしこ／＼。能文乃書はおくれ。出穐なるを専らとせよ。



院艶書

日蓮上人報書

書類

五老軒許選

院艶書

○屋すじの玉すりの梟といふ声あり。鸞姫をまねく文
かのまやゐるとふうめじ。毎をまてをめじ。ゆくさきじいも
多かなりしく。まてをめん。ある字乃尾し見るまて。

日蓮上人報書

○ご新麦壱かし。ゑうしな云々。油ッやうお酒来。
南無妙法蓮華経と回向いたし候

以呂波文字傳序

上古日本乃文字ありて。今に用ゆるもの數多三
字あるべし。山川の詠よりも。漢字よりさきにて本邦乃
文字なれども。果てたる人もなけれど。假名字（かなじ）に
ある。萬葉集出（がき）の事より前。訓と声とは交（こゝ）へ用ゆ。
古稀以呂波文字多きは。男女學早。これをもて
文字の用を達せり。源順（したがふ）が。萬葉集のかなも
声と訓とのまぎらはしきが故なれ。けふは吉備公（きびこう）
乃製作にてアイウエヲ乃五音を相通の文字と

を。太和假名といふ此事なり。又いろは文字を。世に
弘法乃作とのミいへるも。一決なるへし。一説に
以呂波仁保へ土知利奴留遠。
以上十二字ハ護命乃作。
和加与太礼曾門祢奈良牟宇為乃於久也
末計不己衣天安左幾由女美之恵比毛世
寸。以上三十五字ハ弘法の作。

京乃一字ハ僧敬乃作也。いろはもと四十七字
なる故。僧敬此一字を加へ。是を歌境の界とす。

王玄乃字体あまたあるべけれども。一二三よりはじめ。千万億の
数字ハ。聖徳太子のかぞへ出されしより流れ来るといふ。又ら
空海。勤操。僧敬の三師。共に造るともいへり。又兼良
乃篆疏にハ。四十七字ある。是此経の数。彼漢声を
假りく。和字とまたもやさまざまいろはを国字といひ
て。天竺震旦にも和字とハいへども。是よりて漢字
にして。其文のすがたなるをや。文の数あり。色欲経
三の乃さ随にして。おのおのく来世まで。其むちかし給ん
小ぎみ地よりなる。伝ふる体依代にして仲乃字性ぞいふや

まれ。然いはやまるゝ事指し。まげへの字ハ。へノ乃へ
みゝく。ためすしく鈍(ナメ)なるべし。二ま。へとんの分(ワカチ)
まで。およいふしとする縁。ちゞみえんといふなり。とハ去なり。止
乃字にはあらぬぞ。すべていろはを訓をとらぬぞ。皆声を
用るによりく。ただなる事明(カ)なり。つ乃字に縁あるぞ。
そじ門乃字と伝へし。但口傳。むかし年世。世に安武
とおもへるぞ。点をうけ不におげなるとぞ。よくよく安武に
何ゝぞ。顛(テン)公の押(ヲサヘ)乃点なり。むかしの字ハおもへく氏字
まして。哥(キ)篇(ヘン)に作るを非也。又をの字ハ嵩の字なり。

さいまほ口乃を奥(オク)のかたといふ。いろハ夜(ヨ)の字にて。ちゞみ
えんといふぞ。兄(エ)乃字に喝(キ)をこ。神橘諸兄(タチバナノモロエ)の兄なり。
上代のいろは文字と。ホじ今様乃字たがいハそれ
きぶちがへも。源氏にあやかりまでゆて。何ゝね袖に
なり果てるなり。そのこと。源氏物語出る。ほにさんだきや
とがあやまれるとぞ。紫式部も。二神を欲きたるぞ。
当世野首卿傾城の書ちらしてる字形(ナリ)には。正字乃
俤(ヲモカゲ)もなく。此様源氏に出る人もなくまり果。以ゝぞんわ
乃字形をうだなり。ほもはしりらし。京極黄門完

あふれて乃。かなばのいとて。宮人おゝく称しけれ。歌仙の的
模様なして。是を志らざること多き天下のなかまれ
べし。さればとて和る文字に用る假名字にハわかりやすく
字にあらし。上古の古筆に出すて知べし。これ元祖乃
陀羅尼字の類なれば假名遣一通り。和歌のことの
志るべきなりして。志るく吾儕諸の上より。ぬるく
吟味をもなし。しかるべし。さじかれ虫のきよび
よしされば源の正字をまもりし古風なるを。其一とてハ
き事なれば。文字の上でいしきことを強ふりよさへ文字を

ミつしおやゝゆて。古篆乃篆書に。きとぶふとの通。
真字を主となれ。行を主となせる。草字を古篆より出
そくまいとく行をやしきよりて草字に精し
からんとおもふ。篆字によりて。其源をたどり
して考るべし。さ称ば和歌乃いろは文字も。其
正字ばかりて。きをしらずといへども。そとい異いなるよりて
しうかとなる。文字乃正字をすゝやかに。異
なく人ともみあるべしと。九安亭の主人。
篆氏浜村。風俗文匠。くれづいを之を記

書しける。此話を跋とす。宝永三丙戌春

三月望。

右本朝文選全部十巻者五老井
許六先生之撰也嘗聞先師芭蕉翁
欲之此志文集未調而止之先生十
五年來継此志終其功業雖然玄秘
之深旨之門人皆寡顯於文序二三
子合力而徼發畫策為自他更無
出與書林井筒屋刷之梓全世一字
綫嚴無較也只恐脩偸罷可嘆
和歌之神誅罰者乎

寛永廿三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

洛下二條下寺町

野田治兵衛尉梓